サビエル生誕五百年
巡礼の道
595
藤屋 侃士
（下松市平ケ丘）

# 高校を卒業して60年
## ～人生の節目～

高校を卒業して今年で60年になる。私の若いころは1クラス50人。山口高校の同期生は普通科だけで400人、商業科を含めるとさらに多くなる。隣の山口中央高は女子校だったが、山口高の方は女子が50人と少数ではあった。

大学受験に「あさかぜ」に一緒に乗って行ったのは、学年トップクラスで、今、山口市で弁護士をしている末永汎本君。何せ、彼は在学中に司法試験に合格した。

その同じ夜行汽車に乗ってやはり大学受験に行ったのは、同じ号車ではなかった今の夫人の弘子さん。当時交際していたかどうかは知らないが、同期同士で結婚した数は少ない。

同じ夜汽車が縁だからでもあるまいが、彼らの結婚披露宴の司会をする。彼の息子も弁護士になり、結婚の際はその披露宴の司会もさせてもらう。そして、彼の息子を付属山口中学で教えたのは私の息子である。改めて、人はいろんなつながりの中で生きていると実感する。

横道にそれたが、その彼から去年10月「来年の5月21日前後は空けておいてほしい」と電話がある。

この年齢になって、半年先のことはわからないと思いながら理由を聞くと「来年は我々が山高を卒業して60年の節目に当たる。山高全体の同窓会は毎年8月15日に山高で開かれるが、東京周辺に住む同期の同窓会『燦々（さんさん）会』に今回は節目なので山口からも出かけて行く。その際の司会を頼む」と言われる。

今も司会と言えば私を名指ししてくれるのがうれしい。燦々会を立ち上げたのは私の中学からの親友で、東大にストレートで入学した。優秀な者ばかりに囲まれて、いつまでも自分のような出来の良くない者まで大切にしてくれることは私の財産である。

末永君が常宿としている名門「山の上ホテル」に集まったのは44人。出世した人、しなかった人いろいろあるが、今も愛称や「君」づけで呼びあう。

病気で参加できなかった友が、各人にCDで山高校歌や応援歌が入ったものをプレゼント。当日持参したり、欠席者から贈られて来た名酒が席の後ろに並べてある。この道の通でもある末永君によると「ここにある10本ばかりの酒だけで100万円はする」という。

美しい陶器に入った紹興酒（3万2400円とある）

同期で結婚した末永夫婦が全体の絆を強めてくれる

集まった44人だけではない連帯を感じる。

余った台湾の年代ものの紹興酒を東京同期同窓会長からプレゼントされる。うまくもない司会者をみんなで盛り上げてくれるのが、昔の仲間だ。

高校生活の3年間をともに過ごした仲間をつなぐもの…より良い絆（きずな）を保ち続けているのは、同期同士で結婚した友の存在が大きい。絆は自然にできるものと思いがちだが、やはりリーダーシップを持った者が意図的に交わりを持たねば続くものではない。

約1割が集った東京での同期会。60年が過ぎ、誰もが老いたのは事実だ。来年も女性幹事が中心に開くという。

ウルマンの「青春」の詩にある「青春とは心の持ち方、年を重ねただけで人は老いない」。良き仲間とともに育てられた自分。酒を飲めない体になったが、プレゼントされた紹興酒を見ながら61年目の再会に思いをはせる。感謝の気持ちを持ちながら…。有り難う、幹事の皆さん!!